

# 悠久の河

7

## 周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

百姓たちは、己に科せられた運命だと、ただ黙々と農作業に精を出しが、かつて夢が有つた時のよくな輝きは、どこからも感じられなかつた。

彌兵衛の父の宗因は、家正の亡き後、ひつそりと庄屋を務めた。必要なこと以外では、ほとんど外出せず、書物を読み耽る日々であつた。十九歳の彌兵衛に庄屋の大役が回つて来たのは、父の宗因の健康上の理由と政治向きのことを好まぬ宗因のたつての願いからだつた。

村が水害に遭う度に彌兵衛は、祖父の家正が言い残した

「川幅をもつと広げよ」

という言葉を思い出し、心が逸つた。それを諫めたのは、父の宗因であつた。

「彌兵衛、おまえは、まだ若い。時期を待て。人間ものごとを興すには、時期というものがある。必ず、その時期がやつて来る。今は、その時に備えて知識を蓄える時ぞ。今、蓄えておくことは、きっと役立つ時が来る。人間、進み始めたなら決して、後戻り出来ぬことがある。逸る気持ちだけで、中途半端なことをしてはならぬぞ」

彌兵衛は、この時期、父の宗因の勧めで、旅に出ることを心掛けた。

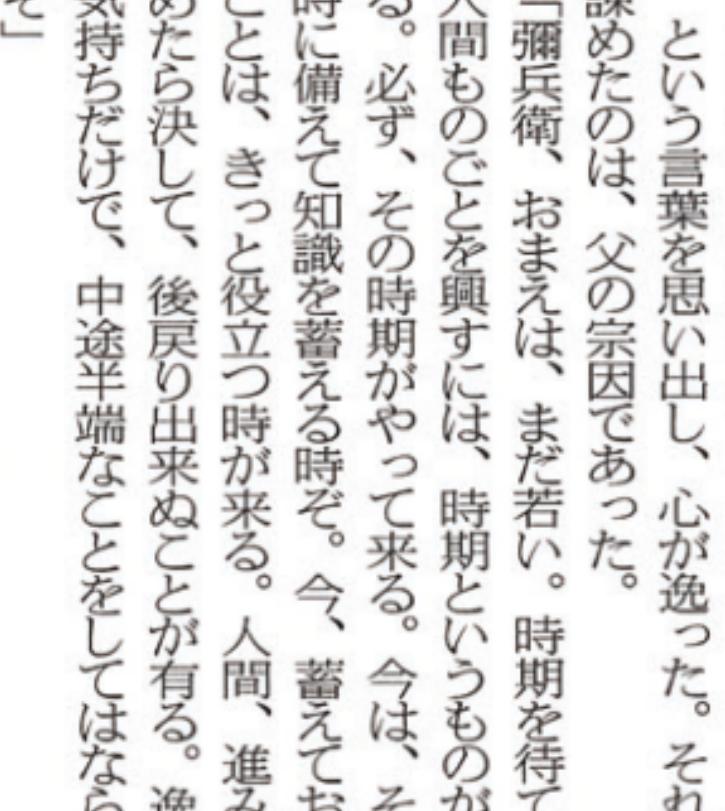
「見聞を広めよ」

という宗因の教えは、体が弱く、ほとんど外に出ることが出来なかつた宗因自身の望みだつたかもしれない。

六歳で水の事故に遭い、命を失つた次男の文蔵の七回忌の法事を無事に済ませ、正林寺の住職と共に膳を囲んだのが元禄十五年（一七〇二年）六月二十七日だつた。

朝から降り出した雨は午後になつても降り止まず、雨足は激しくなるばかりだつた。

「元気のいい末っ子の文蔵さんが亡くなりなさつたのも、こんな激しい雨の後でしたなあ。これから、もう七年にもなる。早いものですなあ」正林寺の住職が、しみじみとした口調で彌兵衛に語りかけた。



画 寺戸良信

## 父との別れ

百姓たちは、己に科せられた運命だと、ただ黙々と農作業に精を出しが、かつて夢が有つた時のよくな輝きは、どこからも感じられなかつた。

百姓たちは、己に科せられた運命だと、ただ黙々と農作業に精を出しが、かつて夢が有つた時のよくな輝きは、どこからも感じられなかつた。